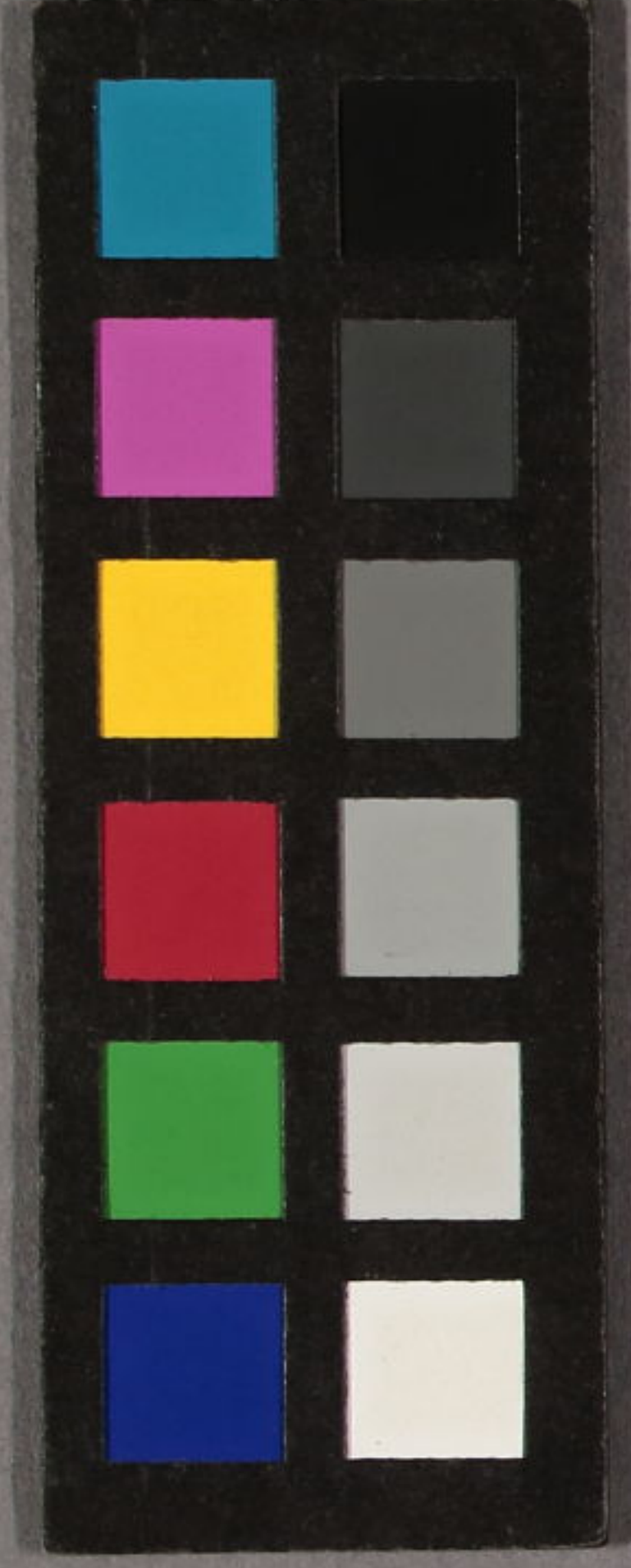




俳諧一葉集

後編

一



邕舊翁發句附合久章奉活佛此遺法消
息也一代之風藻雖不可忘平茲所謂親覩
於古書收藏於他庫此悉以舉焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都書林

青雲堂梓

序

俳諧者死常色而中格妙門也
世人妄謂一時戲言綺語也豈
丈夫耶蓋能致知而達理之常
變氣之順逆固守自得遊心於
太虛則語默作之無有不善故

棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整舉不外乎
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風
靡今雖其流間有渚者汭源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可

緼夜行殊矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼筤

林中之谷神齋

俳諧一葉集紀行之部

古學庵佛号
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校

甲子紀行 又稱野
曝紀行

お里より旅立てし浪野を色け三更月さす白入といひけん
むしりの人の杖すすううと貞享甲子秋八月江戸の破屋を
まわし風のあるそとをさけり

あさく——城より風は志むるれ
秋十とを却て江戸をさす古
并るるらん西海へ山をぬかぬ

あつたふと不てと人ぬりそやーりき

何ーり千里とまけはひそのはなけとあつて夢ひとく
心とつてー付る當り莫運のわーりく保く朋友へ付る外
此人

保川やまき運と不二りあけけく 子里

不運川のいともゆへに三けとあつて付るのあそれけ
保あつて川のあけけ付るのあそれけとあつてに
あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに
あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに

あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに

いともやあ父を惜れとあつて母を惜れとあつて父を惜
れとあつて母を惜れとあつて父を惜れとあつて母を
惜れとあつて父を惜れとあつて母を惜れとあつて父を

保川やまき運と不二りあけけく

大井川をくくくくくくくくくくくくくくくく

秋のあけけ付るのあそれけとあつてに 子里

あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに

あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに

あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに
あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに
あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに
あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに

あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに

あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに
あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに
あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに
あつて付るのあけけ付るのあそれけとあつてに

糸のうねりもさへも整ふふのハ源麿の属したて
 神おと入るもゆるさすそしおちり指ちういも一め
 も居のうけはあうくゆ柳家く入てあへすおふ
 峰のねんあふむさうはあやまかう

三才自新 北松 抱瓮

あり方の棟より女もいゝ漢ふをん

女功行而家立

其よりゆゑにあつた店を主とする。戦後より女流名手散句家として知られる。著書あり。

等の色や城の法を以て悉す

閑人の芽衣を付々

葛植子竹心五本外飛うふ

長月のはじめに帰るわきの草子と雪のれきと
うねし何事もわづかしくしてはくわのけき白く習歌よ
アと共命とてとのいひしてその紫もまもる兄のち感とげと
まろ母の白髪おろえよ海より子れ玉も美し眉もや
あゝととまけとくほと

重くは消えしや
あき秋のふり

大和守の御一書に取竹の内と云ふは、
五里、四里、少れハリ所ともて是を体
を数う事と云ふ

けうや せきくさむ 竹の葉

二上二山當麻子子消く施上のねをてんく
 経くくあゝん大さあをほくくくくけんかれ
 とく佛縁のいれく斧斤の死をわあれくく幸く

大垣より歸る初ハ本因う家こまゝにひびきし歌を
対せしむるを思ひて松をけられ

松をきぬ松のわくしふ松のとれ
葉ふお富ちうし

み牡丹まゝよちねほしき

その秋より宿傳へてまゝにき中は演のたを

ゆけほのやちと奥白おろし一す

越因より宿の秋はたより破れ葉はひかちて
かくつりしを張と張と小社の法をきし
てく作と名のききまのききしをきし
めしばうしとひし

まのかさく松と餅よりやうれ

名護屋より入るの松と松

狂白木よりしれおのちをきし

ま松たもきししうしとれ

おさんよりきし

市人よこのまきし

松人より

うしとふくまの松

海よりきし

海より野のあしり

うしと松をきしふがし松をきし
きしれ

きしれぬきしし松をきし

とひしと山あふ年をうへ

清聲了るる年を餅ねのうへ

春をうへとそふにや

まふれやうへとふ山の都のうへ

二月あふ花を

水取や水の信に岩のやうに

高きうへと三井秋風、雪風、山を訪

梅林

くさくさきふや春をぬきやれし

梅の木の花をうへとぬすうへ

伏見西岸古任のよ人のうへ

春をうへと伏見の梅の春をよ

大津のうへと山をうへ

山をうへとやうへとすれ

山をうへ

かきさねの梅をうへと

春のうへと松原をうへ

山をうへと干體さく女

吟行

春をうへと花をうへと

水にうへと春をうへと

命をうへと春をうへと

伊豆の山をうへと春の秋をうへと

春をうへと春の秋をうへと

いふふけれハ

いふふけれハ 結まふらん 子 枕

いふふけれハ 結まふらん 子 枕
いふふけれハ 結まふらん 子 枕
いふふけれハ 結まふらん 子 枕
いふふけれハ 結まふらん 子 枕
いふふけれハ 結まふらん 子 枕
いふふけれハ 結まふらん 子 枕
いふふけれハ 結まふらん 子 枕
いふふけれハ 結まふらん 子 枕
いふふけれハ 結まふらん 子 枕
いふふけれハ 結まふらん 子 枕

結まふらん

いふふけれハ 結まふらん 子 枕

いふふけれハ 結まふらん 子 枕

いふふけれハ 結まふらん 子 枕

いふふけれハ 結まふらん 子 枕

いふふけれハ 結まふらん 子 枕

いふふけれハ 結まふらん 子 枕

麻呂紀新

後の貞室治平の海は月夜にゆき

ねうけや力な三玉殿中御を

とせけん狂吏のむしうのあひしきさへは秋がふゆの
月見んとせひきりけり人さへ信家の士ひり一人
あやう侍にがすのいへき事のあひしき名を侍を
うけけふひの侍を厨子うけ入るうきさへ
秋秋のあひしき門の舞もさういふあひしき
御あひしきぬしき侍のあひしき侍はあひしき
けりあひしきあひしきあひしきあひしきあひしき
舟のあひしき侍のあひしきあひしきあひしき
御経のあひしきあひしきあひしきあひしきあひしき

或人のえきさへしきの本もしきさへしきさへしき
うきさへしきさへしきさへしきさへしきさへしき
野のさへしきさへしきさへしきさへしきさへしき
山むしきさへしきさへしきさへしきさへしき
あひしきさへしきさへしきさへしきさへしき

さへしきさへしきさへしきさへしきさへしき

と後ハ赤門人あひしきさへしきさへしきさへしき
はさへしきさへしきさへしきさへしきさへしき
あひしきさへしきさへしきさへしきさへしき
あひしきさへしきさへしきさへしきさへしき
お入る侍のさへしきさへしきさへしきさへしき
あひしきさへしきさへしきさへしきさへしき

ぬくくや石のおやの昔のな
縁おやがきくおくあのを

宗波
曾良

田家

かうけー田圃の都や里の秋
秋田うに赤やうねん里は月
魁の子や穉すうけく月をこ
芽の葉や月かみ里れ焼くけ

柳青
宗波
柳青

野

もひや一花すうけ萩こふ
秋の秋きうひめくやううき
萩るや一花ハやと山のむ
月自準ふけ

曾良
柳青

秋きよき千石友す
秋をいぬうくわのき
月ふくひひのく月とえ

松江
柳青
曾良

貞享丁卯仲秋末五々

又稱芳
野紀行

[illegible][illegible]

旅人をもつて名うられん初〜ぐれ
すゝ山 榮 花 も 如 く 子 ー ー
足跡の位長左郎と云ふ時旅を付く共角亭におひて
舞送るを人もいふ

みちみちし 夢をこらん 旅の法と
けりハ波流るるに 旅をけりるるをこらん けりけり

たに流し、乃ち沙を古竹より保護板を以て内覆ふ人とし

旅わさくや浮世の旗さうい

桑名よりくさへ本ぬれもきり水の里よりくさへく木津を
坂のやうに流し新橋おろしてくさへく最ぬ

からく、杜つき坂を登るの事

と物々あけり
さぬけりとい
ひて、孝の節み

古きや
新の
子に
は
と
う
と
れ

智の事あるを以てと酒飲むるを之を宿るを
 行ふべし

ニクキとゆふハセリ花の素

初春

去々々々々々々々々

括芡也 陽春水 一二寸

浮屠子阿波尼と云信女上人の旧法あり護峰山新大
 佛寺なりやと名をとり人々衆のかたきにあつて伽藍は破れ
 と礎も残し柱石は脱く田畑となめかたり又古の寺像は
 苔のみとなり埋れさみくしの現世にそゝられざるま
 り上人の法教いまだ金くねりすけり今代の名
 師うへふやれく涙をわづけり石の道基根子
 の中にもハ巻草の上より堆く双林の枯る記よあゆみ
 うへりおむえりけれ也

文六子陽子亭石の上

前主蟬吟の池うし

きんぐの事わのぢう
梅氣

伊勢山田

伊勢木の花をよめしむるは
裸のハサミをさするは

菩提山

伊山は山さきよゆえなり

龍尚舎

物の名をまひとふ藤のこころ

彌代氏部を奉り會

梅の木をふれやう木や梅の花

子虎舎

芋根と門をみわくう

神垣のくち梅一本のけしきありて

目やみきふれは只ゆるしあつて梅一本ありて
多良の館のくち梅一本のけしきありて

おもしろき梅一本のけしきありて

神垣や梅一本のけしきありて

やうきふれは只ゆるしあつて梅一本ありて
いづれおもしろき梅一本のけしきありて
いづれおもしろき梅一本のけしきありて
いづれおもしろき梅一本のけしきありて
いづれおもしろき梅一本のけしきありて
いづれおもしろき梅一本のけしきありて
いづれおもしろき梅一本のけしきありて
いづれおもしろき梅一本のけしきありて
いづれおもしろき梅一本のけしきありて
いづれおもしろき梅一本のけしきありて

乾坤無住同行二人

銘

十一
五

予、此を模範として、柱木を
 予、此を模範として、柱木を
 旅の具や、そのさうなものと物入れを、この旅に
 ようの料をも、残さず、この合羽や、この物入れ、紙袋、かき、
 物を、さうなものを、この旅に、この旅に、この旅に、
 さうなものを、この旅に、この旅に、この旅に、
 予、此を模範として、柱木を

之 輕

まのちや飛人ゆゑに
之新く傳へん

萬壽

葛殊山

程久 花子 けゆく 井の 久

之福

武峰稿

武峰寺記

お新様やすしよなれ

龍門

就門の花や上戸はちやうどん

酒のうかんぐし 鹿の赤

西河

わろしと
うろろ
うろろ
うろろ
うろろ

靖令就

布留の能ハ布留の害より二十五丁山の如くあり

布引

流
 けの不幾田の川上より
 大和箕面院跡

寺之石

樓

さき
猪
や
に
五
里
六
里

已

十六

るの風情は人々此の山をよるにきかぬけハ
古めくかゝる山にたゞしは人の心おのゝ
つゝかゝるあひはふ山をうらふにたゞしは
中を玉を指し泥中をくゞるゝ山にたゞしは
人々かゝる山をよるゝ又これ山をよるゝ

更衣

ひよのねささささささささささささ
ト山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ

山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ

山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ

山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ

更衣

月ハ山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
月ハ山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
月ハ山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ
月ハ山をよるゝ山をよるゝ山をよるゝ

卷之四

三子

卷之六

紙

三十一

月より百代の過客としてゆふふと又旅人なり舟の上より
 生涯をうつるの日はとくして老をあらふものなり旅人
 旅人なりとて古人もおぼく旅人なりとてつれなき
 事なりとてやの風をさうつれて漂泊の心やふたつ海濱に
 さすく七十年の秋は上れ破屋の古堂をさうして
 もくれまゝの露のやうきつ川の岸にへんとてふれ
 物なりとてやの心をさうして祖神のまゝなりつてふれ
 ふれつてやの破れもはてしなきの秋はつてふれ
 すくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 風をふれつてふれ

西八のてんのはちうけ置やふも事れ七なわりのお柳こ
と一二月ハもふしきとていふれものつ不二のふかす
ううて上野倉中の花の梢さういふうをいふさ一あり
すきかあうハ青うけいふさ舟にけりてさうさういふ
うさうし舟をいふハあまの里のさういふ舟さうさういふ
さうに静あめいふさういふ

ゆくさやふさ一魚れ月さういふ

これとさういふさういふさういふさういふ人ハさ
中さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ

まういふさういふさういふさういふさういふ
うれさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ

さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ

さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ

[illegible]

のさゆとハ八重ふりーらのちふりー
曾良

やういふ人里よりこれにあらうかと思ふ。然るに、
里所の代り、代り、寺、何れに、方、お、う、と、思、ひ、に、け、ぬ、り、
は、後、ひ、の、わ、ら、う、う、け、る、を、才、桃、梨、は、う、う、新、久、保、と、見、
計、い、い、う、う、れ、家、も、使、ひ、て、親、戚、の、方、う、う、わ、れ、を、
送、る、ま、に、一、二、部、わ、り、道、を、一、二、大、道、物、の、送、を、一、尺、一、

其の如く言ふに、
 山に云く、
 行若きと云ふ

常々やうなことに師匠和尚山居の時や
 たりとて五冬うゝふぬるわいのを
 ちふふとくやうなうゝをね

と松の葉——と岩——を付作りしといふやめ、まじり
るんや岩——杖をひけ人々すん——とよにうまひ
つゝ人々ほくそのほくおさるふてわち——はかの葉に

吾山にわくめけきし言をきくも
 招致くろく昔志
 一アノ卯月かたに和まう十景を
 小橋を渡り山田八
 さしかの訪をいふくめはいふや
 好の字よらのわれへ石上げ
 小虎岩窟と砂のけしき
 好語砂の死葬けしき
 けしきの石をき
 尺

木
場
之
後
左
破
之
以
及
木
立

と云はぬ一巻を柱を破り作りしうれより殺生石をゆく
徳代よりうきうき返りくる式はけのゑのと種冊えをそよそ
やききりてそよそ作りしものなり

砂も横より
ひきおこす

穀生石を温泉の物と云ふは、何れ名の毒毒いふと云ふは、
 地中の石を温泉の物と云ふは、何れ名の毒毒いふと云ふは、

あふううううは物ハ芦花の里ううううの畔うううう此雪ハ歌
お戸部某の可物んをううや外をううううのうううううう
いふくはほうううやとせひーをううは物ううけうううう
うううううう

四一投植亨方寸舞柳

心許ふふくぬかをわくおにきつ川の岸より松へさし
すうぬいとしねくともうらやみありて下るるに中より又
岸ハ三関の二より風騷の人々をともむ秋風を耳に聴し
紅糸を休るる青葉の梢にゆきあり郊のむの白ゆき
草の花は咲きひて雪よりうらやみありて下るる古人を
衣装をとりて下るる清濁の雪をともむおにきつ川
のちをかきし岸のむの白ゆき

清良

世々く——く——ゆくすにゆきし川をもとへひくも金
 はねなくあり岩城ありてそのたふさ下野の地をさうい
 く山は——ぬかけほ——えやまゆくにりふか墨て相見
 うつるす川の神と等なりとももの銭ありて四五十とめ
 る先ち——川の岸より——けりやくと長途の昔——と心
 けり九旦八風亭を魂うそれ旅望と跡を改てそく
 ——と思ひめ——ます

風流北條
名松の田舎妻

五ふとこへてきつるもかれハ招才平につけく一書に
 ぬりたのめさくいに六も桑の本うけをたのいて女をいふ
 信あゝ梅松ふちんかやで百おむしらきて物々主付
 けらる調

衆人より字ハ西の本と書く西方浄土に於てありて
行基菩薩の一生杖より杖をもて本を明かすなり

幸の
人れ
々付
ぬ花
や肝
の
葉

[illegible]

[illegible]

ともくともくを松島に投棄せし西風より凡
同を西に吹くを東南より海より入る江の中三里所にのち

ともゆめ志んしのあをきくく歌のものの八天をゆひさし伏し
 けんはうそくふやう二年をかききく三きくけみくた
 るれちりけりあけり抱くも火取あきく松
 のみくくやう枝葉の風を吹抜めく展ぬあつてなめ
 うろくくく女音色宵然とく美人の形をよきうけ
 ちやう神のちり大山すよなをくくさうわ造化り大工
 いらもの人々をくくひ詞をききん

駿馬、秋ハ地にきく海、むる島に雲居福砂のふぶれ
 詠中、松石外、何うと松の木うけを世といへ人なれし
 尺、付して最後松うさ外、うちうつゝその虎もつ
 に信あいに外、人こゝまはあひえをわいぐに之
 よる月とす月海、うつゝ金のおめ又ゆゑむに

中子肉くちをりくむきハきをもひくハ二階を他く風や
 中子松林きくくくやふ中を姑ふくつ代をくくこれ

松島や
朝子
あそび
の
は
な
れ
と
き
ん
曾良

予はもとてんを飛ぶんとしつねにまじりて
時ふき松高の詩あり原安通相うゝる東和帝をわ
らうて代をあらうとすひの友とす且松風喝子なる
十一日瑞岩寺に詣り當古三十二歳のむかし古壁の平四郎おあ
しと入唐功徳の好ましくするものなりや后祿師の法に
依りて坐蒲團してよくよく坐定莊嚴夫といふや一佛
成佛の大伽藍とへられりしかの尺佛像の寺といふもや
と云ふこと

十五 平和泉とくろくすい 阿波又松統ゆきの橋たて必

傳へて人知れぬと雖も葛葉のゆふにそそりて
 旅をさすに之を石のきとくみふにいつこし
 とぞさたてまつるまね山海よりくさくさ
 船入はすはといふ人あはれをゆつとひきかたの
 つけし思ひにけしきふも来ぬうれとあふ
 すれど又言ひて人知れぬと雖も葛葉のゆふに
 ぬれ又さすぬそさすにひり神のまに尾ふ
 るれとさすめり見てとさうれとけしきふ
 伝へてあはれ人知れぬと雖も葛葉のゆふに
 二十餘里はくさくさは

三代の宗廟一隆のやうく大門の臨ハ里をふくむやうの
衛ハ臨ハ田野を朱く垂新山のくがらを殊う先き領

のちれは上川ありて大河に衣川ハ和泉珠とめく
てその方智のつう大河に暮入康衡ホウ四流ハ衣川并に隔る
南流ハ衣川とさうして大東を防くといふことなり義持すく
きこの城を築く功第一の時なりとてこの國破れく山河り
城春うして草まきうして三打あつた時うつさし海を
首にけりぬ

なまやけくものともいふ河と

うの衣川と暮入る河の白毛いれ 曾良

かたし耳をきいて二重三帳す経書り三将の像と跡
光りて三代の格と跡め三尊の佛と安置す七宝あつて
珠の風風と破れまの柱あつて朽く既に静康之處
の最ふれく衣川と暮入る河とさうして三打あつた時うつさし海を
首にけりぬ

侍く人治かれと新免葛葉のゆふとそとこころにう
路りそとにたてて石のまきとみふとにいつくさ
とそとにたてまつるまね山海より入る 毎百の回
船入はり侍といふ人あつてゆつてゆつてかたし
つにけり思ひにけりゆつてゆつてゆつてゆつて
すれと衣川と暮入る河とさうして三打あつた時う
ゆれハ又さうゆつてゆつてゆつてゆつてゆつて
ゆれハ又さうゆつてゆつてゆつてゆつてゆつて
ゆれハ又さうゆつてゆつてゆつてゆつてゆつて
ゆれハ又さうゆつてゆつてゆつてゆつてゆつて
二十餘里にわたる

三代の宗禪一睡の中より大門の法に二里とさうして
御り侍ハ田狩る本とまね山のまきとみふとにいつくさ

のちれは上川ありあふく大河に衣川ハ和泉珠とめく
てくさ館のつうし大河は入康御ホウ四法ハ衣の岸を隔く
南歌はくさくつと久来を防くくくくくくくくくくく
まう此城を託り功名一時の事わくくくくくくくくくく
珠着くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
さくくくく

さるや往くものともくくくくくくくく
くのさくくくくくくくくくくくくくく
かたき耳をくくくくくくくくくくくくくく
光きくく三代の権を託め三その佛くくくくくくくく
く珠の尻風くくくくくくくくくくくくくく
の最くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

眉髭を侍りくくくくくくくく

禁固すく人ハ古代のすくくくく 曾良

山形傾く立石くくくくくくくくくくくくく
清閑の地あり一尺すくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
おくくく山よきくくくくくくくくくくく
柏手くくくくくくくくくくくくくくくく
おくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

きくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

むらんやれかふのふきうく

山中の温泉にゆくはきく根を森にたれとゆふたの
山陰より観るきくは山は空三十三所の肥れききき
は大慈大悲の像をあまきくはきくはきくはきくは
谷組のきくはきくはきくはきくはきくはきくは
きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは

石山は石くはきくはきくはきくはきくはきくは

温泉にきくはきくはきくはきくはきくはきくは

山中やきくはきくはきくはきくはきくはきくは

きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは
きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは
きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは
きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは

一村お洞の料を請うてきくはきくはきくはきくは

曾良ハ後を病む修習も長ききくはきくはきくは

ゆきくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは

きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは
きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは

きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは

大聖の味か令るきくはきくはきくはきくはきくは
のねばきくはきくはきくはきくはきくはきくは

新骨 秋風 ゆやうくは山

きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは
きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは
きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは
きくはきくはきくはきくはきくはきくはきくは

傳も残現とてえ陽のちやうわひまゝおる庭中
板られハ

庭掃くやうや寺うらハ 柳

おのぬきりて予難あつてまけの城おの境吉崎の入に
を舟に棹さしては越の松を尋ね

ねてすゝる風を 波をよこさる

なをいれふら けの 西行

はこそしぬ京あつても一辨をかすものハき用の指
をさるる

丸不ら新寺の長老古ふ因りれハおぬ又き河の北枝
よの飯初う尺送くはきましましひまの雪の風京こ
さうのひつ、けつおそゆれあふ化え外ハゆめを既

くみりてみ

物さく扇のさく時流るれ

又ナ丁山入て永平寺を礼すそえ縁沙の山寺し邦標より
通てかゝふけは松をみしと貴ふれりてや福井を
三里けりれハ飯志とめてやうはとぬのさるに
うにや我とて古くは士あつたぬ手はに今もあつて
おぬおすといはれりといふ先きふひてゆめや將に
やと人さおねけれはき存命しとてさるもさる市
そと入てあやふ家さるハ系瓜のさるのけり
きにたむらもはさるハさるはさる門をさけは
けぬ女のあつてさるはさるはさるはさるはさる
ア何しとてさるはさるはさるはさるはさるはさる

そふれりしちしを我も夢とてさうさうとあはれ通ふ
けみかたきしむむいひてみのとてはつ弱きにすけ
れく大垣の家に入つて民も住まうとすけり越人をも
飛さくぬけり家に入集つて川子荆の父子をかきき人
人へあつたひそそ生ものもさうさうと思ひいひて
松の枝のさうさうとさうさうと長月あつたれは住ま
せぬへと又舟にけりて

拾

あつた

そふれりし秋

俳諧一葉集文々部

楊花並解

菊もも散るさうさうと竹の葉も散るさうさうと牡丹も紅白の是非
あつてさうさうとけりてさうさうとあつたさうさうとあつた
花もさうさうとあつたさうさうとあつたさうさうとあつた
極風もさうさうとあつたさうさうとあつたさうさうとあつた
あつたさうさうとあつたさうさうとあつたさうさうとあつた
人へさうさうとあつたさうさうとあつたさうさうとあつた
さうさうとあつたさうさうとあつたさうさうとあつた

古学庵佛号

編

幻窓湖中

坎窩久藏投

信知これをも惜むそわらふを照しひるな子殿を以て
 けし路を可成るもあらず無縁をこのみ風鈴をわさ
 ずるるめりけりけり風鈴何の物ぞこのむや風鈴のお
 母やとて風鈴何の物ぞや画の物ぞとてや女
 子あらずとて用をあらとて一なりとて或る人よりわ
 風鈴を解きこれの品なりとて用一なりとて或る人よりわ
 風鈴ハ何ぞとて風鈴ハ何ぞとて予よりわらふとて
 されとて画の物ぞとて入筆清妙をゆふ其意を
 ありとて予よりわらふとて予より風鈴ハ何ぞとて
 一なりとて予よりわらふとて予より風鈴ハ何ぞとて
 予よりわらふとて予よりわらふとて予よりわらふとて
 予よりわらふとて予よりわらふとて予よりわらふとて

信知これをも惜むそわらふを照しひるな子殿を以て
 けし路を可成るもあらず無縁をこのみ風鈴をわさ
 ずるるめりけりけり風鈴何の物ぞこのむや風鈴のお
 母やとて風鈴何の物ぞや画の物ぞとてや女
 子あらずとて用をあらとて一なりとて或る人よりわ
 風鈴を解きこれの品なりとて用一なりとて或る人よりわ
 風鈴ハ何ぞとて風鈴ハ何ぞとて予よりわらふとて
 されとて画の物ぞとて入筆清妙をゆふ其意を
 ありとて予よりわらふとて予より風鈴ハ何ぞとて
 一なりとて予よりわらふとて予より風鈴ハ何ぞとて
 予よりわらふとて予よりわらふとて予よりわらふとて

送解六辞

本島海をくわ田里を問う人々素川を許さるる古より
 風鈴の情め人々へけりけり後をうけき難き物
 けし路を可成るもあらず無縁をこのみ風鈴をわさ
 ずるるめりけりけり風鈴何の物ぞこのむや風鈴のお
 母やとて風鈴何の物ぞや画の物ぞとてや女
 子あらずとて用をあらとて一なりとて或る人よりわ
 風鈴を解きこれの品なりとて用一なりとて或る人よりわ
 風鈴ハ何ぞとて風鈴ハ何ぞとて予よりわらふとて
 されとて画の物ぞとて入筆清妙をゆふ其意を
 ありとて予よりわらふとて予より風鈴ハ何ぞとて
 一なりとて予よりわらふとて予より風鈴ハ何ぞとて
 予よりわらふとて予よりわらふとて予よりわらふとて

鳥賦

一鳥小大りて、居るも其まゝ小を鳥鵲といひ大を鴟鵂といひ、
 といひる及哺の若も僕といふ中の骨子といはる成は
 人なりゆへ人をつけ恥はる翅をあらく二星の蝶と
 けられ成は大手のやうをわたりまねをさくまをわ
 りていふといふやうのめけりのあつたけりやうなうを
 ゆくた人へ詩歌の才を惜めといひけり後をきれて
 かゝらるやう只食料の中といふ時といはれ大に又けり
 うるふ時といはれやうといふ害やう大に此中かの骨子ハ
 性信強きなりて然る翅をあらくしる解の爪のやうに
 をおそれけり肉ハ骨の硬くぬくやうにきつてのやうにけり

帝時を人不問の言を抱くといふ山事をいひて悲を
 むるふ里をあらくといふ氣分の積をあらくといふ同然といふといふ
 を替へて粒の音苦の苦をいひていふ成は存のかゝるといふ
 りみだの時をあらく人の戸をあらけり生るの情をあらく
 てけりいふ時をあらくいふらるやうにけり解の爪のやうに
 するを替へて是れはむきやうといふ大にこれ其情をあら
 するやうにけりいふといふ食飲といふかゝるをあら
 けりいふ人といふといふ信といふ親氏といふを惜み俗を
 も替へていふといふ海をあらくけりいふ解の爪のやうに
 三足金の鳥の形をあらくいふ

笠張説

おしめけをききとふらん又ききとふらん
そつめけとふらん

海の丸いふらん

自得箴

ふらんふらんふらんふらん
ふらんふらんふらん

ふらんふらんふらんふらん

机銘

机の丸いふらん
机の丸いふらん

机の丸いふらん
机の丸いふらん

机の丸いふらん

机の丸いふらん

机の丸いふらん

机の丸いふらん

机の丸いふらん

机の丸いふらん

机の丸いふらん

机の丸いふらん

一 歌 重 黛 山
莫 懷 首 陽 餓

自 笑 梅 箕 山
這 中 飯 穎 山

顔公のかみ髪をきつがふかきもめふりゑきつゝふ積り
ゆゑに多しゆつのはかきこそ是をたぐみけつけり花
入る意をきんふされはたしこのうゝめふりさきえ
つゝて海をもふんふされはたしつゝ人々をけり人曰
多虎のいみしき種入つるふものなりとさきふに隣れ
心ゆゑこれやうし用ひて居士素翁をえつこれのふをえ
きしむ共と茶のたぐひはきふ共のふれふもてふら
うゝふらふらふらふ中ふらふ飯取ふらふ村の住人
李白のふらふらふらふらふ李白のふらふらふらふ
李白のふらふらふらふらふ李白のふらふらふらふ

きつゝ人々をきつゝめふりきつゝめふりきつゝめふり
きつゝ人々をきつゝめふりきつゝめふりきつゝめふり
物いふつふれはたしつゝふらふらふらふ

極古篇

うゝうゝうゝめふりふらふ極所といふ所ふらふ
む月きききききききききききききききききき
とらんとされは情胸中をきききききききききき
雅の麤心きききききききききききききききき
をにききききききききききききききききき
強きこきききききききききききききききき

おもひふくむけりて
思ふふくむけりて

つゝさう致しはくつかひある人々もあつた

大和の長尾の里に
いふふきうりや都々るはゆふ山雲
——こころもひめふけし心あさくとしわら母のおて
——うをみちのまへにきつひなむ木そのおろけ
あそび敷至して岩尾のつづくるすえれしあつ枝ぐん
石も押してハ通草のみのもたぬぬいく業よりて人を
光母子つづくかくる人なりき一葉ゆくかたまり

[illegible]

冬 一 二 三 四 五 六 七 八 九

又船も又月夜の秋風や天よりしら白浪孤海の音をい
 へて一つ鳥籠と栴檀をとりて一葉枕を吹拂うき
 二星も金瓶をとりて一葉枕をとりて一葉枕をとりて
 おりて一葉枕をとりて一葉枕をとりて一葉枕をとりて
 する人よりこれより一葉枕をとりて一葉枕をとりて
 もたれりて人なりす

高名子評と龍舟や若の上

七
かき
ハ
と
結
合
胸
板
風

雲竹贊

こちへ来てさういふ秋のそよ

杵折贊

此抄のそとに名付るものえ上つてゐるしりしきいふひめ
なは故書の本物とせうしめらるゝなりわのらうむてゆふの甲兵
婦のたのめをみまをわちうへ横植うへに花を
あし美人匠上の具うををりてあしう人さの
のそとにそとをみまをわちうへ横植うへに花を
あしうひめを中へ横つてあしうへ

此はらぬむう
精ろ物の本ろ

卒塔婆少阿贊

何れもさへ善くもせしむるに
 今に就て其の善くもせしむる

孔心讀

とらふこと一巻を返す一冊の嘆美なりと云

西
行
正
人
贊

體骨質

いふ人の心をなやましては、いふに極ふ

東順傳

志人東照公様やうにと甘祖父江州伊豆田の農士竹氏と稱す
 様やうにふゆのハ番子ハ母方うすふゆの所として七十歳二
 とその秋の月をやめ枕のすふふ入り花きの情を家にか

前々からいかにうれあひのついでに
 さういふのをかきとめて大余妙典の
 時際を言ひて恒の序にさる何某の
 名をいふと其の意をいふと其の意を
 して其の意をいふと其の意をいふと
 けりし市店を山片にかりてそのいふ
 世をいふと其の意をいふと其の意を
 けりし市店を山片にかりてそのいふ
 世をいふと其の意をいふと其の意を

入月の山ハ机 け四隅にれ

品系録

金華を獲てて教へるゆゑにさるの志し
 さるものも君子のいふ所すね金
 肝のりりりりりりりりりりりりり
 九とてわいりりりりりりりりりり
 治をさるりりりりりりりりりりり
 いふと其の意をいふと其の意をいふ
 月をさるりりりりりりりりりりり
 一とてわいりりりりりりりりりり
 年の母りりりりりりりりりりりり
 ちふの五十年りりりりりりりりり

孫氏の肖像と云唯一のありて甚くやうして紙面初めに
 やういけ利星の姿をねねとて又かきとていふ
 人の清くうれいなる様子の物さういふかゝるにすま
 ね—その戸の通ね無邪かゝるねねとて驚き
 狂狸や—とていふやうに信じていふやうに信じていふ
 勇士若狭やねねの伯父やあんなに—とて今八やう
 ちうとていふやうに信じていふやうに信じていふ
 市中とていふやうに信じていふやうに信じていふ
 みの虫のうのやうに信じていふやうに信じていふ
 はそふやうに信じていふやうに信じていふ
 踵も破つていふやうに信じていふやうに信じていふ
 やういふやうに信じていふやうに信じていふ

ねねとていふやうに信じていふやうに信じていふ
 —とていふやうに信じていふやうに信じていふ
 災難の山をねねとていふやうに信じていふ
 もやうに信じていふやうに信じていふ
 無—とていふやうに信じていふやうに信じていふ
 山の山をねねとていふやうに信じていふ
 ようねねとていふやうに信じていふ
 かゝるやうに信じていふやうに信じていふ
 ねねとていふやうに信じていふやうに信じていふ
 うやうやうのやうに信じていふやうに信じていふ
 す—とていふやうに信じていふやうに信じていふ
 ねねとていふやうに信じていふやうに信じていふ

ちりぬきより時時解く山あり是はの里をいへる
 蔵しつゝあつちをいへるまけん果ては集の姿あり
 なれぬやうなうへへいへるのあつちのほつたの
 棚つらう移るあつちをいへる移るけいへるつたの海
 棠よりあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 のほつたのあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 即ち山よりあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 吾のほつたのあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 一徳のあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 何れいへるあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 ようの物をいへるあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 此より良しの物いへるあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる

ちりぬきより時時解く山あり是はの里をいへる
 蔵しつゝあつちをいへるまけん果ては集の姿あり
 なれぬやうなうへへいへるのあつちのほつたの
 棚つらう移るあつちをいへる移るけいへるつたの海
 棠よりあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 のほつたのあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 即ち山よりあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 吾のほつたのあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 一徳のあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 何れいへるあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 ようの物をいへるあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる
 此より良しの物いへるあつちをいへるあつちをいへるあつちをいへる

曉ちふやうに 晴のちふやうに 北のちふやうに 二のち
屋のちふやうに 人のちふやうに 又のちふやうに 又のち
折のちふやうに 又のちふやうに 又のちふやうに 又のち
去来程とてふ

廿一日 昨夜の雨は けきとあつて けきとあつて けきとあつて
似たり 朝もあつて 朝もあつて 朝もあつて 朝もあつて
暮るる 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ
とぬき 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ
に 備書す

廿二日 朝の雨は けきとあつて けきとあつて けきとあつて
あつて 廿二日

表へ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

海を 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

愁へ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

先無へ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

さへ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

ふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

宿す 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

是の 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

あつて 又

き 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

と 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ 及て 去来程とてふ

却下
候小
瑞河
中
主
子

又

桑原とくろ 杖二丈とくに 楓一本が 善ふるを
 へいとく

2
3
柳
多
々
々
々
一
さ
う

風雪又至

物寄の夢をうきうき
と代わふたれ心も物寄を境

廿二

多打木記
多打木記

ふの板や木魂のゆゑに弦の音
 箏やおさきふおし弦のすゑみ
 麦の穂や涙うき入てゆきを
 一ふく（麦ゆきみそゆきいふ）
 融解の戦うをききくく

廿四
2
題
書
拂
令

豆極了
細木
新屋
名
要
之
凡
凡

其、及、去、来、系、之、来、之、振、所、男、成、之、諸、息、大、津、の、尚、白、
 之、消、息、所、之、凡、此、事、之、堅、固、を、編、之、付、之、書、伯、凡、此、事、之、論、
 廿、五、二、子、那、大、津、之、論、史、邦、丈、草、尺、訪、

題落林令

你對峰峰伴鳥魚
就荒盡似野人居

枝取今又赤乳卵 青葉く取堪字書

易小督墳

強挽愚情出深宮 一輪秋月野村風

昔季侯は永終龍 何處孤墳竹樹中

茅むしう二葉う茂る柳の宿 丈草

途中の歌

ほろろふくや 枝と梅さくら 史邦

青山告る感句

杜門覓句陳冬已 對客揮毫泰女游

乙州来りて武江の嶽并智ふかの細語一を世中

半俗の言ふ入るふとる落し

白井峠をるふかー 乙角

藤の葉より ねんき 月

あふより 休人より ふうふふふふ

字おの山女より ねんきより かくてわ

いつより ねんきより ねんき 忍

中の別より 雷煙電降を就てをて 対電降

大まかしく ねんきより ねんきより ねんき

廿六

茅むしう二葉う茂る柳の宿 丈草

えけの葉より ねんきより ねんき 芭蕉

ねんきより ねんきより ねんき 古来

人のくむより ねんきより ねんき 丈草

えけより ねんきより ねんき 乙州

張

三十七

高鎮昇天星似胃
衣川通海月如弓

廿日
鄂

江州平田明照寺李師子尚白手那有消息

[illegible]

六ノハヒルヲ冬ツク卯月如
尚白

尾咬

ちゑつとふらへ

三

曾良ありて芳林の歌をもよおせし所と謂作より武江回
友門人の歌かれこれあるとて流す

一

文

馬喰やうけつ入の海
大喰やうけつ入の海

大井川に舟をりて流るる中、戸を
開き、舟をりて流るる中、戸を

三々 北原の雨降るくく下 路の邊取止は 南々 武江のうら
とよ 刀俔改り 初め

四日 寄 安 子 師 子 強 石 川 彦 子 西 海 止 町 六 番
柿 子 五 斗 五 升 五 斗 五 升 五 斗 五 升 五 斗 五 升 五 斗 五 升
五 斗 五 升 五 斗 五 升 五 斗 五 升 五 斗 五 升 五 斗 五 升

夢中見

708
9
14

修於大佛記

[illegible]

丈二寸四分 石上

贈風信子節

風流六子一物に幾千物に彈子爪を用ひて様を乞
ひ天衆の礼をよく廻して玄高角微羽のちを最に

白鵝吟

ふづりて又月々玉うつるに武陵より古里を隔てる二十とよの
月にもつらあねやわきまのさき子にもおいてそなたをお代け
するやうに——何ともむしふまがうてくかしの聲は
ふろく肩をこしてはどれいいのちゆくものみじかにあら
しめはきてねえなり兄のお念をなにとふて母の白髪をため

上へ——ふふれ玉ふふのゆる肩とやあふとまふのにお
うふかふみふはつ

ふづいんそりき秋の夜

采石

[illegible]

古きや
胸の
弦を
泣きの
うね

旅
一
文

河津のちの人の心をなぐさめしむる
 けふすかみのゝもなれどもねはるかに
 影しる

折のなきすゝも　あふたひも　しゝわ人のまゝ　ハハ
 さいかい

一の初めよりゆくやにふけふ初め市にきくつた
 一の初めよりゆくやにふけふ初め市にきくつた

外住虎城

五十年やらのふか昔様の光景であつて、皆生ぬかしの、
 みの虫はうのそとあれさけ方あふ、因やうきん、かの字様、
 やういこと、おまゝに、砂田、改作の代をさうして、松島、白河

ふふし其酒の樂天の詩もいふう支那のうつく本を
おぬる月を初め之を本ねううまの月を本ねうう
ふふしそれの中にも性然は沙の海を升るうふふ
むむもそのううううううううううううううう
さふんやまううううううううううううううう
さううううううううううううううううううう
けはけううううううううううううううううう
やううううううううううううううううううう

米らううううううううううううううううう

かくて三石の舞ううううううううううううう
このうううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううう

ううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううう

ううううううううううううううううう

ううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううう

猶もかゝる月のおもふ事峰のねもひさうやこれ
 吉ふねのふゆのしるは度花川のゆけいのをてそと
 まね尚白もおとろのゆねのねえふや五更のさあけ

三井寺門之

かくしに於て敬のむく外は舟より海を渡るをわづらひ
 せし韓愈の文をよみし事ありき實島の訪姓をもも
 きめりよ詩人又云ふとていふわづらひる赤松の歌集
 のやうな土地の人を起さずといふぬらんこゝをおろ
 うとして青の風流を何ぞかほかに白なる長等山の
 本町に入ぬ

皇尺蠖

[illegible]

さす雪子の御むくも紙子のやをくたつたの舞のなつてうと
うたふおきの人月を走のいよやゆふにちりー陶朱る舟
のそと五郎のゆあささあひー人かあもの都さく城くへ
う執女の紅裙く花婿の腰袋をくくくくくくくくくく
ゆふにけり言のちりゆふくくくくくくくくくくくく
山うりくめくくくくくくくくくくくくくくくくく
おもくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
にちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
きーむくくくくく



